

○大野愛満、長谷川絢、伊藤綾展、郡山尚紀、八百坂紀子
酪農学園大学獣医学群獣医保健看護学類

【はじめに】犬猫の口腔内トラブルで歯周病が占める割合は非常に高く、小型犬や老齢犬では歯周病になりやすいとされており、3歳以上の犬猫の80%にみられるとも言われている。日常のデンタルケアにより歯肉炎のような可逆性の段階からの回復、歯周炎のような不可逆性の段階への悪化を防ぐことにつながることからデンタルケアの重要性が示唆される。動物看護師としてデンタルケアの分野に貢献できることを検討すべく、現在のデンタルケアの現状を調査し、犬がデンタルケアを好む、嫌がる、またほかのデンタルケアとの併用の状況と口腔内衛生状況との関連性を検討した。

【材料と方法】2015年9月に本学で開催された「動物愛護フェスティバル in えべつ」来場された飼い主および同年10月に北海道ボランティアドッグの会が主催で実施した「セラピー犬適性試験」に参加された飼い主を対象に犬種、年齢、性別、体重等の基本情報をはじめ、現在行っているデンタルケアなどのアンケート調査を行い、同時に犬の口腔内を歯垢指数 Calculus Index (CI) をはじめとする各指数で評価した。また唾液 pH、唾液量を採取し、年齢差や雌雄差、体重比や日常的に行っているデンタルケアの状態などから比較検討した。

【結果および考察】飼い主に行ったアンケートでは有効回答 153 件、任意での口腔内調査頭数は 71 頭であった。今までの報告ではデンタルケアを行っている飼い主は 20%のみというデータもあったが、今回のアンケート調査において効果が有効とされる 2 日に 1 回以上の頻度でデンタルケアを行っている人は、歯磨き 52%、ガム 48%、シート 31%、ジェル・スプレー 25%であった。またそれぞれを好き・嫌い・不明で分けたところ、歯磨き好き 17%・嫌い 50%・不明 31%、シート好き 8%・嫌い 42%・不明 48%、ジェル・スプレー好き 8%・嫌い 17%・不明 76%、ガム好き 66%・嫌い 3%・不明 31%となった。さらに歯磨きに対する好き (24 頭) と嫌い (72 頭) を各指数で比較検討した結果、好きで歯磨きのみ使用の割合が 21%・他のケアとの併用が 79%、嫌いで歯磨きのみ使用の割合が 7%・他のケアとの併用が 93%となった。そして歯磨きのみを使用している場合の CI 値の平均が 1.5、他と併用している場合の平均が 1.2 となった。このことから、複数のデンタルケアを併用していることにより値に変化が生じたと考えられる。また、唾液量は年齢が高くなるにつれて減少しており、CI 指数は年齢が高くなるにつれて増加していったことがあげられる。また、動物病院においてのデンタルケアの指導を受けたことがある人は 21%、ない人は 79% だった。デンタルケアの指導は今後、看護師として貢献していくことができる分野である。子犬のころから病院で歯磨きの指導することにより、歯磨き単体での効果の向上をはかるとともに、他のケアと併用することによりさらなる口腔内衛生状況の改善が期待される。今回新しく検討を試みたデンタルケアの併用と口腔内衛生状況の関連においては、データ数が少なかつたため、今後データ数を増やしより詳細な調査が必要とされる。